

---

# その全てを、無かった事に

相澤塔子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その全てを、無かった事に

### 【Nコード】

N9916F

### 【作者名】

相澤塔子

### 【あらすじ】

片思いに終わりを告げる。意を決しての告白は、有らぬ方へ向かってしまう。きちんと話し合えば済むのに、上手くかみ合わない二人のお話。

【1】（前書き）

【登場人物】

北條 芹菜 ほっしょう せりな  
高校1年生

伊藤 遼太郎 いとう りょうたろう

伊東 慧 いとう けい  
遼太郎の親友

早川 祥子 はやかわ さちこ  
芹菜の親友

【1】

告白する。

それは、生きていく中でそう何度も何度も経験するものじゃない。

まして初めての時は、決意したもの、きつと舞い上がって周りが見えなくなつて、もう成り行きと言つが、その場の勢いと言つか…。

当たつて砕けろつて感じだと思つ。

実際、砕け散るのは嫌だけど…。

放課後。

もう下校時間が迫つていて、校内放送が流れている。

教室に人が一人、入つて行くのを廊下の隅で確認する。

(約束通りに来てくれた…)

こんな心臓がドクドクと早く動いた事なんて未だかつて無いと思つ。

手には汗、呼吸を忘れてしまうほど、酸欠状態で息苦しくなつ

ていく。

ここまで来て、後戻りは出来ない。

ありったけの勇氣と度胸を掻き集めて、ぐっと拳を握る。

私は教室の戸を開け、中に入り、教室内に居る人の前まで進む。

「イトウくん！ あ、あの、好き です！っ、っ、付き合

っ  
」

最後まで言えなかった。

ガラっ！と教師室の戸が開く音。

この一世一代の告白の現場に誰よ！邪魔しに来たのはーっ！！

(あ！ ああ~~~~~っ！！)

教室に入って来たのは、私の想い人、伊東 慧くん。

(?????)

って事は私の前に居る人は？

恐る恐る顔を上げ、その人物を確認する。

「…………っ！」

サーッと血の気が引いていく。

イトウはイトウでも、目の前には居るのは伊藤遼太郎。

「北條さん、ごめんね、約束してたのに少し遅くなって  
それで、話って何かかな？」

伊東慧くんは、話しかけてくるけど、私は完全に放心状態。

「…え、えーっと…」

いや、待て！

まず、こっちの伊藤遼太郎の方をなんとかかせねば！！

「あ、あのね！伊藤くん。さっきの話、無かつ」

「慧！聞いてくれよ！！俺、北條と付き合う事になったから！  
」！

……え？……ええ~~~~~~~~っ！！！！！！

「ちょ、ちょっと…！！」

伊藤遼太郎は伊東慧くんに、告白をされ、受ける事にしたと話

している。

慧くんも「良かったね」と嬉しそうに笑っている。

二人は親友同士。仲良く笑い合っている。

「あ、あの…!!」

声が掛けづらいけど、この場の誤解を解かないと！

「あ、僕は先に帰るよ。遼と仲良くね！」

と言って、私の好きな伊東くんは去って行く…。

伊藤遼太郎と二人、残されても…!! 困るんです!!

って、言うか、私の告白はどうなるのよ…!!

「北條、帰ろうか」

そ、そんなに嬉しそうに、少し照れて笑い掛けないでよ。

この告白、無かった事にならないの？



【2】

翌日。

あんな事があっても学校を休むわけにもいかず。

朝から机に伏して、ダラリとする私に、友人の祥子ちゃんがやって来た。

「芹菜！ やっぱり、玉砕？」

イシシシつと意地悪に笑う。

「ま、ウジウジと恋に悩んで元気の無い芹菜なんて、らしくないし。思い切り振られて、あっさりさっぱりしたでしょう！」

「……………」

「これで、私も伊東くんに約束取り付けた甲斐があるってもんよね」

「……………」

そうなのだ…。

入学してから約3ヶ月。

伊東くんに一目惚れしてから、私の良き相談相手になってくれた幼馴染みで親友の早川祥子。

そして、昨日の告白を後押しして、しかも伊東くんは教室に行くように言ってくれたのは、この祥子ちゃん。

「それで、どうなったのか、ちゃんと言わせてください！」  
「……………」

話さないといけない？

昨日の今世紀最悪で最低な出来事を…。

私はポツポツと力無く、話し始めた。

予想通り、祥子ちゃんはお腹を抱え涙を流しながらヒューヒューと笑いが止まらない。

「や、ヤダ〜！〜！芹菜〜！〜！ちゃんと相手を確認しない、あんなに悪い〜っ」

その通り過ぎて、何も言えません。

「それで、どうするの？付き合っちゃったりするの？伊藤遼太郎と」

「ま、まさか！〜！ちゃんと行って、無かった事にするわよ」

付き合うわけ無いでしょう！好きでも無い人と！

昨日のアレは間違え！大間違え！！

私の好きな人は、伊東慧くんの方！

「でも、伊藤遼太郎はOKしたんでしょー！」

「…うん、…その、どうしてかな？」

と答えると祥子ちゃんに「あんだ、そうとうボケてるわ！」と言われてしまう。

うう、言い返せない！

いつもなら、「ヒドイーっ！」「なんて言って言い返せるのに…」。

相手を間違えて告白してしまったのは事実。

ガツクリと肩を落とす私に、祥子ちゃんはさらに笑い続けた。

【3】

伊東慧くん。

高校の入学式、新入生の挨拶で壇上上がった彼を見た瞬間、恋に堕ちた。

一目惚れ。

さらっとした黒い髪。

眼鏡の奥の涼しげな黒い瞳、優しく微笑む姿に釘付けになってしまった。

本気でこの高校に入学する事が出来て良かったと、思ったほど。

それから、ばら色の毎日。

しかも、同じクラス。この時ほど神様に感謝した事はなかったぐらい。

伊藤遼太郎。

高校入学早々、私に思い切りぶつかって来た男。その反動で窓に激突。割れた窓ガラスで腕を怪我。数針も縫う破目に……。

最悪最低。

茶髪にピアス。

着崩した制服、お調子者でいい加減な人、成績も後ろから数えた方が早いかも。

完全に見た目どおりの軽い男。

なのに、兄貴気質で面倒見もいいから人気も有ったりする。

先生もなんだかんだ言っただ目に見てる。

一番理解出来ないのは、伊東慧くんと伊藤遼太郎、二人の仲がとにかく良い事。

\* \* \* \* \*

「北條！一緒に食べよう！」

お昼休み、パンとジュースを手にして伊藤遼太郎がやって来た。

とことん、無視して避けるつもりだったのに！

「だったら、二人で食べたなら？」

と一緒に居た祥子ちゃんが、席を譲ろうとするのを私は彼女の腕をガシッと強く掴んで、目で必死な思いを訴える。

「や、やっぱり、私も…一緒に、いいかな？」

きつと、私の眼力が凄かったんだと思う。頬を軽く引きつらせた祥子ちゃんが、伊藤遼太郎に向かって言う。

伊藤遼太郎も「もちろん、イイに決まってるだろ！」と答えて3人で食べる事に…。

傍から見れば、ここだけ異様な空気が流れているに違いない…、と思いながら大好きなウィナーを口に入れるけど、今日はちっとも味がしない。

伊藤遼太郎と祥子ちゃんは、自然に普通に他愛ない話をして盛り上がっている。

でも、私には会話の内容が耳に入っていない。

とにかく、早く食べて、この場から立ち去りたい。

「……………ふえ？」

「……………ふえ？」

食べるのに夢中で、声を掛けられた事に気付くのが少し遅れてしまっ。

「今日、一緒に帰ろうぜ」

「な、何、言っ」

何、言ってるの！誰があんたなんかと！と言いかけたけど、ま、待て！ここは、先日の告白は誤解だ！と間違いだ！と言えるチャンスかも…。

「べ…、別にイイよ」

きちんと話して、仕切りなおし。

私の好きな人は伊東慧くん。

だから、あの時の告白は伊藤遼太郎ではなく、伊東慧くんのも  
のなのだから。

【4】

「失礼します」

そう言つて、ペコッと軽く頭を下げ職員室を後にする。

当番でも係りでもないのも、運悪くクラス全員のプリントを回収して先生に届ける事になってしまった。

さあ、これで今日も終わり！帰ろうと教室に向かって振り返ったら、あいつが立っていた。

そう、伊藤遼太郎。

しかも、私の鞆を持って。

「さあ、帰ろうか」

そう言つて歩き出す。

そうだった！今日は一緒に帰ると約束したんだ！そして、帰り道にあの日の告白は誤解だったと説明するつもり。

“つもり”なんて悠長な事、言つてられない！

はつきり、きっぱり、ガツンと言つてやるんだから！

正門を二人で出て、一步後ろを私は歩く。

そ、それより、いつまで持つのよ！私の鞆！

「ねえ、伊藤くん！私の鞆、返してよ！」

「ん？俺が持ちたいんだから良いだろ？」

「…はあ？」

持ちたい？持ちたいって？私の鞆を？

「俺、歩くの早い？」

「ふ、普通でしょう」

私の歩みに合わせて隣に並んでくる。

「あ、あのね…」

「あ、あのさ…」

今、ここで「付き合いません！」と言おうとしたのに、伊藤遼太郎も同時に話しかけてくる。

た、タイミングの悪い男ね！！

「わ、私は後で良いから、先に」

「そう？ 実はさ…」

伊藤遼太郎は、言い難そうに話し始める。

しかも、「ごめん」と謝ってくる。

？ 私、何か謝られるような事された？

「ほ、ほら、腕！ その…、窓ガラスで怪我して…」  
「！」

思い切りぶつかった拍子に、身体が窓ガラスに激突！割れたガラス破片で腕を切ってしまった。

原因は、伊藤遼太郎だけど、決してわざとじゃないし、たまたま私がある場に居合わせたという不運の連鎖。

祥子ちゃんに言わせると、ぼーっと突っ立てたあんたも悪い。

「気にしないで、もう治ってるし、傷跡残ってるけど目立つほどでもないし」

「…うん、でも…ごめん」

また、謝ってくる。真剣な表情で…。

「もう、言わないで！ウチの親も怒ってないし、蒸し返すものでもないでしょう！」

そう言えば、こいつ、母親一緒にウチまで謝りに来たっけ。

「そ、それより、鞆！返してよ！！」

「え？あ、ああ」

「早く！！」

「腕、痛まないんだったら…、ほら」

そう言っつて、笑顔で鞆を渡される。

私は鞆を受け取り損ないそうになる。

一瞬、息が止まる。

真剣な顔の後の、最高の笑顔。

な、なに？い、今の笑顔は？

予告も無く、意表を突いて、そんな顔を見せるなっ！

「それより、北條！これから、芹菜って呼んでも…っつて、おまえ、顔が赤い？」

「なっ、何でも 無い！！」

私は駆け出してしまっう。見惚れてましたなんて、気付かれたくなくて…。

どうして？どうして？あんなヤツなんか…っ！！

駆け出した私の後ろから伊藤遼太郎が叫んでいる「OKでいいよなー？」と。

何がOKなのか、話なんて全く聞いてないから分かんないけど、もう駆け出したんだ！

今更、戻れない。

「勝手にすればーっ！ー！」

結局、誤解を解く事も出来ず、翌日から「芹菜、芹菜」と連呼されるようになってしまった。

後悔先に立たず…。

【5】

「芹菜ーっ」

あれから、私の事を「芹菜」と呼ぶ、伊藤遼太郎。

「……………」

返事の仕方、完全に間違えた…、「勝手にすれば」なんて言わなければ…。

こんな事には、ならなかった…？

何度も「呼び捨てはイヤ」って言っても、「だったら俺の事も呼び捨てにすればいいんじゃない？」って言うってくる。

結局、話は思わぬ方へと進むばかり。

クラスの皆も、この二人は付き合ってるんだ…っという空気が流れて始めている。

しかも、その空気が長閑で、和やかで、ほんわかとしている。

どろろして、皆、温かな目で見るの？何？この祝福ムードは？

「芹菜、付き合う事にしたんだ？」

と祥子ちゃんはニヤッと笑っている。

「ど、どうなってるの？ウチのクラス？」

私だけ、この奇妙な状況に付いていけない。

この雰囲気、理解出来ない。ちょっと、こ、怖い…んだけど…。

「照れなくても良いからね。もう、おめでとう！って感じ」

「はあ？何がおめでとうなの？」

だつてえ〜つと、祥子ちゃんは話してくれる。

あの窓ガラスを割った事件で、あんたと伊藤遼太郎ってどこか、  
ピリピリしてたでしょう！

それが、ピンク色のラブラブムードになったんだもん。この際、  
クラスの為にも伊藤遼太郎とどこまでも行っちゃいなさいよ！

「……………」

祥子ちゃん…、行っちゃいなさいよ…って、どこへ？

私は、どこにも行きたくないよ。

出来れば、ここに居させて下さい…。



【6】

朝、学校に着けば遼太郎は私の側にやって来て、色んな話を聞かせてくれる。

私は、一応聞く振りだけで返事も無く、相槌も曖昧で、ほとんど聞いていなかったりする。

同じクラスなだけに、一日中、一緒。

クラスの皆も、時にはあからさまに、時にはさり気なく、私たち二人になり易いような空気を持っていつてくれる。

全然、嬉しくないのに…。

遼太郎も遼太郎で私を完全な彼女扱いしてくれる。

私の好きなイチゴジュースを奢ってくれたり。

化学の実験の後片付けを手伝ってくれたり。

帰りに本屋に寄った時、手の届かない高いトコにある本を代わりに取ってくれたり。

他にもいろいろ数え切れないほど、彼女と言うよりまるでお嬢様？お姫様？

それは、とても居心地よい。ただ、その彼氏が遼太郎である事を除けばの話。

\* \* \* \* \*

体育の授業中。

この時だけ、遼太郎の姿を視界に入れなくて済む時間。

「ねえ、芹菜ちゃん」

「なに？」

クラスの女の子が数人、私を囲んでくる。

「最近、芹菜ちゃん、さらに可愛くなってきたよね」

「は？」

皆が、うんうんっと頷いている。

「なんて言うか、ピリピリした感じが無くなって来た」

「……………」

「そうそう、柔らかくなって来たよね」

「……………」

わ、私、そんなにピリピリしてた？

「遼太郎くんのおかげかな」

「まさか、付き合うとはね」

「あんな事があつたから、どうなるかと思ってたけど」

あんな事…。

私がぼーっと突っ立てた所に遼太郎が思い切りぶつかって来て、その反動で突き飛ばされて窓ガラスに激突。そのガラス破片で腕を怪我したヤツ。

なんて言うか、何これ？

ここで、付き合つてなんかいません、って言つたらドン引き？

この場をどう対処していいのか分からず、はははは…っと思つて苦し紛れに笑うしかなかった。

はあ…。

私は人知れず溜め息を零す。

朝も昼も放課後も、遼太郎に付き纏えわれ、ヘトヘトの毎日。

クラスの皆からは微笑ましく見守られ、先生からも「おまえ達が仲良くなつてくれてよかった」と言われる始末。

あのクラスの雰囲気からして、ますますあの告白は誤りだと言  
い難い状況になってしまっている。

でも、そんなに私って、ピリピリしてた？

遼太郎は苦手だ。

あついう雑な人と関わりたくないと思ってたのに、運悪く傷つ  
けてしまった者と傷付けられた者という関係になってしまい、ただ、  
それだけの関係だったのが、あの日の告白でこんなにも周りが変わ  
ってしまっなんて…。

お昼休み。

教室に居ても遼太郎は私にベッタリしてくるし、クラス全員の  
温かな視線が気になるし…。

居場所無い…。

仕方なく廊下をフラフラと、ただ歩いている。

「あ、北條さん」

「！……伊東くん」

思わず、ほっとした声を出してしまう。苦笑してる私に「元気が無いね」と気遣ってくれる伊東くん。

「何か、あった？ 遼と」

「…?!」

「最近こんな風に一人で居るのを心配してるんだよ」

「…っ!!」

やっぱり、伊東くんは優しい。彼だけは、私の気持ちを分かってくれる？

「あ、あのね、伊東くん。実は遼太郎とは」

「遼の事、頼むよ。ああ見えても優しいヤツだから、じゃあ！」

と言って笑顔を見せ、伊東くんは踵を返して去って行く。

「……………」

初めは一目惚れ、それが憧れに変わり、段々好きになっていった。

この気持ちは本当に、ずっと大切に温めてきたのに。

行き場を失った想い。

もう居なくなつた彼の背中に、私は

『好き…』

私にだけ、聞こえるように呟いた。

【7】

あんなに午前中は晴れていたのに、帰る頃になって雨が降り始めた。

しかも、どしゃ降り。

傘、持って来てない…。

しかも、遠くで雷がゴロゴロと鳴って段々近付いて来ている。

通り雨だから、少し待てば小降りになるかも…。

空を見上げながら、そんな期待を持ってみる。

「芹菜、何してんの？」

「！」

りよ、遼太郎？！あんだ、先に帰ったんじゃない…。あれ？私に先に帰れって言ってたんだっけ？

相変わらず、私は遼太郎の話はきちんと聞かないでいる。

遼太郎は私の姿を見て、気が付いたらしく「傘、持ってねえの？」と訊いて来る。

「うん、まあ」

見れば分かるでしょうっ？じゃなきゃ、こんな所で雨宿りなんてしないわよ。

「一緒に帰ろうっか？」

「いいよ、傘1本で二人は無理！」

まさか、このどしゃ降りの中、相合傘して帰ろうなんて考えるんじゃないー！！

「じゃあ、芹菜が使えるよ。これ」

「は？」

そう言っつて遼太郎は傘の柄を私の手に握らせてくる。

「また、明日な」

「ちよ、ちよっと、待って！」

遼太郎は雨の中へ飛び込んだ。ずぶ濡れになると分かっているのに。

私の手に黒い傘だけ残して。

こんな黒い傘、私が差すと思う？

「……………」

生まれて初めて、黒い傘を差して雨の中を歩いた。

翌朝は、昨日と打って変わって雲一つ無い快晴。

上空からは太陽、地上からは水溜りが反射して、眩しさが増すばかり。

そんな光の中、不釣り合いなほどの黒い傘を持って登校。

借りた物は返す。

他人の目が気になるけど、こればかりは仕方ない。

傘立てに遼太郎の傘を立て掛けた時。

「おはよう！北條さん」

「おはよ、伊東くん」

丁度、傘から手を放した時、伊東くんが声を掛けてきた。

「その傘…、あ、そういう事！」

「？」

何が「そういう事」なんだろう？

勝手に納得している伊東くんは、「なに？」と尋ねてしまふ。

彼はいつも以上に優しい瞳を見せて

「今日、遼は休みだよ。熱を出したんだって」

「え？」

「風邪かな。濡れて帰ったんなら……」

「……………」

伊東くんの言う通り、遼太郎は濡れて帰った。

だって、私に傘を押し付けて、そのまま雨の中へ。

私はそれを目の前で見ていたんだもの。

「あ、そうだ、ちょっと待ってて！」

伊東くんがノートの端に何か、素早く書き出している。

ピリッと破いて紙を差し出してくる。

「これ、遼の住所」

「え？」

「傘を返すついでに、お見舞いに行くって、どう？」

「……………」

手渡された紙と傘を交互に視線を動かす。

意外に近いんだ、あいつのウチって…。

行く、行かない、どっちとも決めないうちに先生が「悪いけど、伊藤遼太郎に渡しといてくれ」とプリントを預かってしまう。

クラスメート達も、心配してくれたり…。

わ、私はちっとも心配なんてしてない…のに…。

傘もあるし、プリントもあるし、ウチから遠くもないし…。

行かない訳にはいかないと…。

伊東くんから教えて貰った住所を頼りに、遼太郎の家を目指す事になった。

表札を確認。

『伊藤』

いざ、チャームを押すとすると、どうしてこんなにも勇気が要るの？

だからと言って、ずっと、家の前で立っていても、近所迷惑？不審人物？

ささっと、プリント渡して傘を返して、「じゃあ、お大事に」って言って、それですぐに帰れば済む事じゃない！

えいっ！！

ピンポン。

チャーム鳴らした後のこの待ってる間が微妙に落ち着かないよね……。

「はい、どちらさま？」

「あ、あの、ぷ、プリント……を……」

玄関から出てきたのは。

りよ、遼太郎のお母さん？可愛らしい人だ。

「も、もしかして……、せりなちゃん……？」

「は、はい！」

って、何で私の事知ってるの？

一度、ウチまで謝りに来た時は、私は部屋に籠ってて、両親が

対応してたから会ってないのに。

「あなたが芹菜ちゃんなのね！さあ、どうぞ！上がってちょうだい！」

「え？」

「時間無い？でも、少しだけなら良いよね？」

「……………」

親子揃って、強引と言うか、人の話聞かないタイプなのね…。  
そういう私も、最近押しに弱い？

こんなに流されるタイプとは、今までちつとも気付かなかったよ…。

玄関で客用スリッパをさっと出されて、「芹菜ちゃん、グッドタイミング！昨日、パパがドーナッツを買って帰ったのは良いんだけど、おばさん一人では食べ切れないの」そして、最後に一緒に食べていけない？と訊かれてしまう。

「あ、あの、私、プリントと」

「コーヒーと紅茶、どっちが好き？」

「…紅茶…です」

断るにも断れない、にっこりと笑っているおばさんを前にして。

紅茶を飲み、ドーナッツを食べる。

遼太郎のお母さんは、一人で話している。

私は、相槌を打つのが精一杯、聞き役に徹している。

と言うより、話の流れは完全におばさんのもの…。

さすが、親子。

遼太郎もこんな感じで、話しかけてるもん、私に…。

「芹菜ちゃん…、この間はごめんなさいね。腕の怪我どう？傷跡が気になるなら整形手術しても良いのよ」

「え？」

しゅ、手術ーっ?!

「遼太郎のせいで、本当にごめんなさい」

「あ、あの…、もう、大丈夫ですから…」

そう？つと気にしてくる表情は、初めて一緒に遼太郎と下校した時と同じ表情だ。

「そうだわ！お留守番、お願い出来ないかな？」

「は？」

「30分だけで、いいの?」

「あの、でも…」

「ゆっくりしていつて、ドーナッツもまだ残ってるし、いっぱい食べてくれると嬉しいな」

「……はあ…」

と、話しながら、おばさんは身支度を整えていく。

私が、つつこむ隙さえ見せない。す、凄い人だ!

あ、そうそう、遼太郎は2階の部屋で眠ってるの。もし、起きてきたら少し食べて、ここの薬飲むように言ってるねと、そう言い残して出掛けてしまった。

何て言うか、上には上が居ると言うか…。

私の都合なんてお構いなし?



…取り合えず、30分ここに居れば済む。

する事も無いので、使ったティーカップを洗う。

「母さん、何か、飲むも…の おわあ!!」

と、2階から降りてきた遼太郎と鉢合わせ。

失礼ね!台所に居る私を見て「おわあ!!」は無いですよ!!

まあ、確かに自分の家に他人が居たりなんかしたら、驚くのは分かるけど…。

「これ、プリント。それから、傘は玄関に」

「あ、ああ…。でも、何してるの?…」

「足留め喰らってるの!」

「え?」

「あと10分もすれば、おばさん帰ってくると思っから」

「?!」 芹菜?

おばさんに留守番を頼まれてたけど、遼太郎が起きてきたんなら、もう必要ない。

鞆を片手に玄関に向かう。

「ああ、それから、おばさんが少し食べて薬飲みなさい！って。あと、ご馳走さまって伝えて……」

！

腕を捕まれた。

目が合う。捕まれた腕が痛い。そんなに力込めて捕まれたら痛いって！！

「イ、痛いっ！」

「え？わ、悪い！！　　って、怪我まだ治ってないんじゃない……！」

はあ？怪我？とづくに抜糸も済んで治ってるわー！！

「ち、違う！！力入れすぎ！！手を放して！！」

「ご、ごめん…あ、あの……お、おれ……」

え？何で、崩れていくの？遼太郎の身体が熱い。

す、すっごい熱！

「こ、こんな所で倒れられても……。りよ、遼太郎！！すっかり  
しっしょっ……」

「……………」

ど、どうすれば、良いの？

いくら遼太郎でも病人を置きざりなんて出来ない！

担ぐ？私が？2階の部屋まで？

「遼太郎、つ、掴まって、わ、わ、私に！」

「……………」

全く、世話なんて掛けさせないでよ！！

階段さえ上りきれれば、なんとか……。私は遼太郎を肩に担ぎ、  
遼太郎自身も手摺を持ってゆっくりと上っていく。

「い、ごめん、芹菜……」

遼太郎は謝ってくる。

「謝らないで」

「い、めん……」

ま、また……。何度も謝らないでよ！

「……う、め……。俺が…好きに、…なったばかり、に…」

？

意識が朦朧としてるのかな？

小さな声でボソボソと言われても聞こえない。

第一、熱でウンウン言ってる人の話なんてまともに聞く気なんて無い。

全く、遼太郎のせいで、こんな重労働するとは思わなかったわよ…！

振り回される毎日。

このままだと、本当に遼太郎と彼氏彼女という目で見られてしまっ  
まっ。

と言っか、すでにそういう目で見てる人がほとんど…。

何とか、この状況をいち早く打破しなくては!!

今日こそは!と、気合を入れて学校へ行く!

「おはよう! 芹菜!」

「…げ…」

って、何て朝から遼太郎が家の前に居るのよ〜っ!!

「朝も会いたいなっと思って…」

「は?」

朝もって、学校に行けば四六時中ベツタリしてくるくせに〜  
っ!…!

無視して早足で学校に向かうけど、悔しいっ!

足の長さが違いすぎる!! 余裕で追い付いて来るのがむかつく!  
ピタッとマンツーマンでマークされている気分だ!!

「ところでさあ、今度の土曜日、どっか行かない？」

「…いい、行かないっ！」

「どうして？遊園地とか？」

「…行かないっ！」

「実は、無料入場券があつてさ」

「…行かないって！」

「親が芹菜と行って来いって」

「…だから」

「何か、都合でも悪い？」

「…そういう事じゃなくて」

「じゃあ、10時に駅前、って事で！」

「…ちよつと！」

と言い掛けて、私は言葉に詰まってしまう。

朝から、嬉しそうな笑顔で私を見ないでよ！！

って言うか、人の！話を！聞かんかーいっ！

何度も行かないって言ってるのに、一度、耳鼻科に行く事をお勧めするよ！

「聞いたよ〜！芹菜！遼太郎と遊園地デートだって〜」

「?!…祥子ちゃん？」

ど、どうして、祥子ちゃんが知ってるの？

私まだ誰にも話なんてしてない…、第一誰にも話すつもりなんて無いのに！

「だって、ほら…」

と、祥子ちゃんがすつと指差す。

!!!

あのバカ！何べらべら喋ってんのよ!!

遼太郎が「遊園地に行くんだ」と大勢の前で話している。

「あの、アトラクションは面白いから乗りなよ」

「お昼はここがお勧め」

「やっぱり、観覧車は夕焼けの中が最高」

その場に居るクラスメイトがアドバイスをくれている。

ふ〜ん、やっぱり、観覧車は夕方か…、  
って、そうじゃなくって!!!

あいつら！余計な事を遼太郎に吹き込むんじゃない!!!

「私も、一緒について行ってあげようか？」  
「い、今、なんと？祥子ちゃん？」

「ま、今回の告白大失敗には、私も一枚噛んでる訳だしさ」  
「…祥子ちゃん！」

「そういう事で、ダブルデートにしよう！」  
「え？ダブルデート？」

イシシシつと祥子ちゃんは笑う。  
4人目のターゲットはアレよ！と。

よ、4人目…？

祥子ちゃんの目は獲物を狙う肉食動物と同じ野生的な目になっている。

ロックオンされた人物は 眼鏡を掛けた、さらっとした黒髪の男の子。

え？えーっ？！あ、あれは、伊東慧くん！！

「さ、祥子ちゃん?!本気？」

「勿論！デート中は、私が遼太郎を引き受けるから、あんたは伊東慧を ね？」

ね？って、本気なの？祥子ちゃん…。

「祥子ちゃん！！大好き！！！」

「これが、最後のチャンスよ！芹菜！！！」

最後のチャンス…。

弱気になっちゃダメだ！

ちゃんと自分の気持ちを伝えよう。

と、いう事で土曜日。

遊園地にやって来た。

祥子ちゃんと遼太郎と伊東さんと私の4人。

ダブルデート。

本来なら、私と遼太郎がペア。

そして、祥子ちゃんと伊東くんという組み合わせが普通なのだろうけど、主導権は祥子ちゃんが握り、遼太郎を掴まえて次々とアトラクションへと誘う。

その後を、私と伊東くんが付いて行く。

こんな感じで、あっという間に1日が過ぎていく。

そして、最後にはお約束の観覧車。

夕焼けの中をゆっくりと空へ上っていく。

小さくなっていく下界を見下ろして「結構、上って来たね」「っ  
て、一緒のゴンドラに乗る伊東くんに言う。

「そうだね」

とひと言、返ってくる。

祥子ちゃんが強引に遼太郎を連れて一つ前のゴンドラに乗ってしまい、私と伊東くんは次のゴンドラに乗る事に。

もうすぐ、一番上って所まで来た。

ここが、本日の最大イベント。ここを逃したら、もう二度とチャンスは巡ってこないと思う。

不連続きの私でも、ここまで続く事は無いと信じたい。

振られると分かっているけど、自分の心に嘘は付けない。

どうせ、振られるなら想い人の口からはっきり言われた方が諦めも付く。

「伊東くん……。あの日の事なんだけど……」

「あの日?」

「えーっと、教室で待ち合わせした時の事……」

「ああ、あの時の事? 僕が遅れて来た……」

私はオーバーにうんうんつと頷く。

「あの日、実は告白……」

「まさか、遼に告白するなんて思わなかったよ」

「あ、あの、だから、それは、違……」

「僕が遼に言ったんだ。北條さんが教室に居るから、会ってち

ちゃんと話してきたらって」

「…え？」

「あんな事もあったし、ちゃんと謝って気持ちを伝えた方が良  
いよって」

伊東くんが“あんな事”があつた日の話をしてくれる。

遼太郎の好きな子が男子達の間にはれてしまい、ちょっとから  
かい半分で「告って来い」なんて言つてたと。

運良く 私にとっては、運悪く、その場に私がふらふつと来  
たから、ますますふざけが過ぎて、その中の一人の男の子が遼太郎  
を強く押してしまつたと。

バランスをくずしたまま遼太郎は、私にぶつかつて来た。その  
反動で窓ガラスに激突！割れた窓ガラスの破片で腕を切つてしまつ  
たと…。

「それ以来、気にしてたんだ。北條さん、ピリピリとしたオー  
ラを出して何か近付き難くなつたというか…」

「……………」

「だから、早川さんから北條さんが話があるつと聞かされた時、  
良い機会だと思つて先に遼を教室に行かせたんだ。仲直りして、少  
しでも仲良くなつてくれたらいいなあ、と思つて…」

「……………」

そうしたら、付き合うなんてそこまで仲が良くなるとは思わな  
かつたよ、と伊東くんは優しく笑つて話してくれる。

最後に 僕達も悪かったんだ。今さらだけど、怪我させてい  
めんね、と……。

係りの人がゴンドラのドアを開けてくれる。

もう、着いたんだ。

先に伊東くんが降りて、私に手を差し出してくる。

こんな風にさり気ない優しさが心に染みてくる。

その手を掴んだ時、私は溢れる想いを感じてしまう。

言わないと！

今日はその為に、こんな所まで来たんだから。

先に降りて私達を待っていてくれる、祥子ちゃんと遼太郎の姿が出口の先に居るのが見える。

でも、今の私には、夕焼け色に染まる伊東くんと彼の周りの世界しか、見えない。

「ずっと、あなたの事が」

あれ？

どうして？

この先の言葉が出て来ない。

あれだけ、意を決してきたのに…。

確かに想いが溢れてきて…、溢れてきて…。

溢れきって、この身体から綺麗に消えてしまった…？

ただ、分かる事は、言ってしまったら、もう元には戻せないという事。

私は、こんなにも伊東くんの事が好き。好きだったのに。

「北條さん？」

「うづん、何でも、何でも無いよ」

そう、好き…だったんだ。

取った彼の手を放し「ありがとう」とお礼の言葉を口にして  
いた。

人生、何度でもやり直しは出来ると言う人も居るけど、過去の  
出来事を無かった事になんて出来る人は居ない。

起こってしまった出来事は、例え神様でも変える事は不可能。

だから、遼太郎が私に思い切りぶつかって腕を怪我した事も。

相手をきちんと確かめずに告白してしまった事も。

その告白を間違いだと言えず、ここまで来てしまった事も。

今となつては、変える事の出来ない過去のもの。

遊園地のダブルデートから、数日経った。

放課後、私は遼太郎を呼び出した。

遼太郎も話があるって言ってたから、丁度良い。

あの日のように、下校時間が迫っていて、校内放送が流れる中、教室に二人。

「あのさ、芹菜……」

先に話すのは、遼太郎。

「おまえの好きなヤツって……、慧だろ？」

「……そうだけど」

まあ、普通、分かると思う。

先日の遊園地の私の様子とか、見てれば……。

そして、あの時ここで会う約束してたのは、伊東くんだったんだから。

「その時、間違いと気が付かなくて、俺、完全に舞い上がってた。その、つい、嬉しく……」

「私も、舞い上がった。慌てて相手を間違えて、告白なんかしたぐらいだし」

遼太郎は瞳を伏せ、掠れた声で話す。

「別れようか……って、別れるっていつのも変だよな……」

「うん、そうだね」

「だけど、その、俺……芹菜の事」

素直に、

「友達からなら、スタートしても良いけど」

「え？」

「ダメ……かな？」

「あ、いや、ダメって事は……無い！無い！」

もう一度、この日、この場所から、告白のやり直し。

今度は、落ちついて相手の顔を見て、もっと知りたいと思うあ

あなたの事を。

だから、その全てを、無かった事に。

END……？

後日。

「ねえ？いつから私の事好きなの？」

「え？」

「いつから……って訊いてるの、言いなさいよ……」

「あ、だから…、それは…」

「ちゃんと遼太郎の口から聞きたいんだけど」

「…っ!!」

「あ、こら！逃げるな〜！」

男の癖によく喋るのに、肝心な言葉は言えないの？

今度は、私が遼太郎に纏わり付いてやるんだから、ね！

END



【12】（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。  
このお話は、これで完結となりました。  
感想などありましたらお送り下さい。

あと、おまけのお話を引き続きUPしてます。  
こちらも良ければ、読んで下さい。  
宜しくお願いします。

相澤塔子

【ここから】（前書き）

こちらのお話は

『その全てを、無かった事に』のサイドストーリーです。

遊園地デートの観覧車。その時の遼太郎と祥子。

祥子視点のお話です。

【ここから】

ここは、夕焼け色に染まる遊園地。

「一体、どういっつもりなんだよっ!」

私とゴンドラに乗る羽目になった伊藤遼太郎は、不機嫌オーラ全開。

そりゃ、そつだ。

初デートを邪魔してるのだから　でも…。

「どうもこうも無いわよ!」

私　早川祥子は腕を組んで、ドカツと座り睨んでくる伊藤遼太郎  
に対し、私も同じように、腕を組んで、ドカツと座る。

私達のゴンドラだけ、左右に大きく揺れる。

次のゴンドラに芹菜と伊東慧が乗る姿を窓越しに確認して、少し肩  
の力を抜く。

「全く、伊藤遼太郎! あんたも、ややこしい事してくれたわね!」

「な、何だよ! いきなり」

伊藤遼太郎は、私が何を言いたいのが分かってるのか…、分が悪  
いと思ってるのか、スツと顔を逸らし目を合わそうとしない。

「この私が、あの日伊東慧に教室に行くように約束させたのに！」

「それは…」

「まあ、あなたの気持ちも分からなくもないけどさ」

「……………」

「芹菜だって、まだ気持ちが宙に浮いたままなんだよ」

「……………」

「あの子が、誰を想っているのか知ってるでしょう？」

「……………」

伊藤遼太郎は小さく頷いた。

知らないはずがない。

いつも、どんな時もこいつは芹菜を見ていたのを私は知ってる。

まあ、気付いてないのは芹菜だけで…。

クラスメートの多くは、伊藤遼太郎と北條芹菜がうまくいけばいい  
な〜と思っっていた訳で…。

私は別にどっちでも。大切な親友の芹菜が幸せなら。

昇り続けてたゴンドラが、今度はゆっくりと降りていく。

太陽が沈んでいく様子を見つめる。

「はあく、私が男だったらな。伊藤遼太郎も伊東慧も抹殺してやるのにい！」

「…おい、早川」

「芹菜の事、本気じゃないなら芹菜の視界から消えな！伊藤遼太郎！」

と言って、イシシシッと笑うと 「早川って、悪魔だ」と返される。

私は、芹菜の為なら悪魔にでもなれるのよ、伊藤遼太郎くん。

「まあ、いつまでもこのまま付き合つのも無理な話」

「…分かってるよっ！」

ちょうど、ゴンドラが一周したのか、係りの人がドアを開けてくれる。

「バシッと決めなさいよ！」

私は、立ち上がる伊藤遼太郎の背中にを入れる。

軽く叩いたつもりだったのに痛かったのか、「いでえ〜！」とちよつぴり涙を浮かべてる。

ああ、悪い悪い！

思わず、本気が出たわ。

「どうせなら、思い切り振られてしまえ」

「……………」

「当たって、砕け散れ！」

「……………」

「燃え尽きて、灰になれ！」

「面白がってるだろ…、早川」

「当然でしょう！」

茜色の空を背に、芹菜と伊東慧がゴンドラから手を繋いで降りて来る。

そんな二人の様子を伊藤遼太郎は、すつと目を細め、ただ静かに見つめている。

まあ、私の出番はこれで終わり。

ここから。

ここからは、芹菜と伊藤遼太郎の二人の物語。

【あれから】（前書き）

完結から、数カ月後のお話。

芹菜視点です。

【あれから】

あれから。

あれから、数ヶ月経った。

私の日常は至って、穏やか。

と、言いたいの…。

「伊藤遼太郎！！今日は、私が芹菜と一緒に帰るんだから！！」  
「ふざけんな、早川！！昨日だって、芹菜と帰っただろうが！！！！」

今にも、取っ組み合いの喧嘩でも始めそうな二人。

伊藤遼太郎　晴れて、私の彼氏となった人。

早川　祥子　私の良き理解者、大親友。

自覚は無かったものの、入学早々、あの怪我が原因で私と遼太

郎の関係がこのクラスの空気をピリピリとしたものにしていく。

それが、きちんと分かり合い遼太郎と付き合うことになり、クラスの雰囲気もほのぼのとしたものに変わったと思われた矢先、私の彼と私の親友が事有る毎に衝突を繰り返す。

「もうっ！！いい加減にしてよ！！遼太郎も祥子ちゃんも！！」

教室には、自宅へ、部活へと向かう者でほとんど生徒は居ない。

私たちの声だけが響いている。

「だって！！伊藤遼太郎が、私の許可無く芹菜の事を独り占めするのは許せない！！」

「だから！！俺は芹菜の彼氏なんだから　って、何でお前の許可が要るんだよ！！」

「誰が、彼氏だって？！！友達でしょう？単なるクラスメイトでしょうが！！」

「それが、昨日から、友達から彼氏になったんだよ！！」

……あゝ、言っちゃったよ……、バカ遼太郎。

確かに、あの時、私は“友達から”って言ったよ。

昨夜、公園で話した時“彼氏彼女”として付き合おうって事になったよ。

でも、今、どうして、それを、祥子ちゃんに言っちゃうかな？

あとで、私からタイミング見て、話すって言ったじゃん。

もう、聞くに堪えられない罵声が飛び交う教室に、一筋に光が差し込んだ。

その光の主　それは、伊東慧くん。

私にそつと耳打ちしてくれる。

それは、私だけが使える特別の魔法の言葉を教えてくれる。

「北條さん。取り合えず、ここは僕に任せて」

「慧くん、ありがとう」

「いいえ。でも、相変わらずだね、遼も早川さんも」

こんな風に、いつも助けてくれる慧くん。

なかなか二人の間に入って仲裁出来ない私の代わりを担ってくれる。

「そろそろ、ストップ！遼も早川さんも！じゃないと、呆れるよ、北條さんが！」

慧くんの言葉にピタッと動きを止める二人。

その反応の速さは、きっと誰にも真似なんて出来ないと思う。

「芹菜！私たち、ずっと親友でしょう！！！」

ガバッと抱きつかれる。

「芹菜！俺たち、ずっと一緒だからな！！！」

ガシッと抱きつかれる。

苦しい。。。

二人に抱き付かれて息が出来なくて苦しい　　というものある  
けど。。。

こんな毎日がこれからずっと続くのかと思うと、かなり心配。

「仲良く出来ないの？遼太郎？祥子ちゃん？」

「出来ない！！！」

「出来るか!!」

左右から同時に否定の返事をされてしまう。

「息がピツたりだね」

慧くんが、にこつと笑って一人緩い空気を醸し出している。

結局、またこの二人は慧くんの言葉に素早く反応する。

「わーわーわー」騒いで、祥子ちゃんが「きーきーきー」と喚く。

そうだ！さっき、慧くんに教えてもらった魔法の言葉を！

出し惜しみなんてせず、使っちゃえ!!

「もう!!二人とも、大嫌いつ!!!!」

一緒に帰ろう、と私は慧くんの手を取って、教室を出て行く。

「芹菜!イヤ!嫌わないでっっ!!!!」

「芹菜!大嫌いなんで言うなっ!!!!」

遼太郎と祥子ちゃんの情けない叫びが響き渡る。

“大嫌い”

魔法の言葉は、二人には十分効果が有ったみたい。

しばらくは、私と遼太郎と祥子ちゃんと慧くんと。

4人で仲良く　って、出来るかな？

【それから】（前書き）

完結、その後のお話です。

遼太郎視点です。

【それから】

それから。

それから、数ヶ月経った。

俺たちは改めて彼氏彼女になった。

芹菜は「友達から」なんて言っていたが、そんなもの初めから関係無く、俺の気持ちは以前と変わらない。

「彼女になりたいな」と言われた時は、本気で嬉しかった。

まさに、毎日がバラ色とはこの事 だけ…。

ただ一つ、あの女 早川祥子さえ居なければの話。

初めは、何も言って来なかったくせに、芹菜ときちんと付き合うようになってから、俺たち二人の邪魔はエスカレートしてくる。

そして、今日は邪魔者の早川を撒いて、芹菜と一緒に下校する。

「ねえ、遼太郎。きつと、祥子ちゃん、怒ってるよ」

「…べ、別に、いいだろう」

「えー！知らないよー！祥子ちゃん怒ると怖いよー！」  
「……………」

怒ると怖いって、そんな半端なものじゃない。

早川の場合、まるで特撮映画に出てくる怪獣と同じだ。

だからと言って、逃げて引つ込む訳にはいかない。

気持ちは、地球防衛。宇宙平和の為、日々頑張っている。

やっと手に入れた可愛い芹菜。簡単に諦められるもんじゃない。

「…てる？」

「ん？何か言った？」

「えー？聞いてなかったの？」

「あ、悪い。ごめん」

もうっ！と言って、口を尖らせて少し不満な顔をする芹菜。

そんな表情も、やっぱり可愛いと思うのは惚れた弱みなのかもしれない。

「明日の約束、ダメになったの」

「は？」

「だから、最初にダメになるかもって言ったじゃない」

「え？でも…」

「何よ！もともと強引に約束させたのは、遼太郎の方でしょう

！！」

「……………」

思い返せば、確かにそうかもしれないけど…。

でも、明日は俺の誕生日。

そして、大失敗に終わった生まれて初めての遊園地デートのやり直しがしたかったのに。

ガツカリ。

「ごめんねー！そんなに落ち込まないですよ」

「もしかして、早川と…？」

「うーん、まあ、そんな感じかな」

「……………」

やっと、付き合うようになったのに、芹菜の中じゃ【俺く早川】なんだ。

「でも、午後からなら　って、聞いている？」

「…　早川って、何で、いつもあんな感じなんだ？」

「え？祥子ちゃん？　だって、ほら、それは…私、そそっか

しい所あるから

「……………」

そそっかしい　否定は出来ないけど…。

横を歩く芹菜に視線を送ると、すぐに気付いてくれる。

少し首を傾げてニコッと笑いかけてくれる。

可愛すぎる…！

「祥子ちゃんって、心配性なお父さんって感じだよね」  
「……………」

父親だと言つなら、娘の幸せ考える…！

結局、明日のデートはドタキャンされ、気持ちもどん底。

そんな俺と対照的に、俺の母さんはテンション高い。

家に帰るなり「お帰りー！」と、声も無駄にうるさい。

「あら？遠太郎、元気無いわね。まさか、芹菜ちゃんと喧嘩な  
んてしてないわよね？」

「……………」

さすがに、デートとドタキャンされたなんて言える筈もない。

どつやら、母さんのメールの着信音のようで、手にしていた携  
帯を見ている。

「これで、送信つと」と、独り言を言っている。

制服から私服に着替えて2階の自室から階下に降りて行くと  
。

「あら、さすが、今時の子はメール早いわ」と言って、母さ  
んは「返信！」と携帯を操作している。

「さっきから、誰とメールしてんの？」

と言って、「画面を覗き込もうとしたら、サッと携帯を胸に押し当てて隠されてしまう。

「コラ！盗み見るなんて！嫌われるわよ！！」

「…っ！！！！」

嫌われる　俺が、今、一番聞きたくない言葉。

「全く…、あんたが学校から帰って来てから、元気無いから、どうせ芹菜ちゃん絡みだろうと思って、何かあったのかメールしてみただけよ」

「芹菜と？」

「言ってなかった？私と芹菜ちゃんはメル友なのよ」

「なっ？！」

ちよつと、待て！！

確かに俺だって、芹菜の番号もメールアドレスも知ってる！！勿論、交換もした！！

なのに、どうして、電話も俺からばかりかけてるし、メールの返事だって　あんなに早くないぞ！！

有り得ねえ…！！！！

「あ、それから、明日、朝から出かけるからね。芹菜ちゃんと「はいつ???!?!」

どん底よりも、下ってあるのか？もう、這い上がれねえ…。

そうなのか？まさか、本当にそうなのか？芹菜の中じゃ【俺く  
母さん】なのかー！…！

「俺、寝る」

そう言って、自室に向かう俺に「あっそ、おやすみー！」「と軽く返される。

母親なら、具合悪いの？大丈夫？とか言えねえのかよ。

もう、立ち直れないかも。

翌日、正午。

はつきり言って、不貞寝。

昨日の夕方から、起きる気力も体力も削がれてしまっている。

俺の16の誕生日がまさかこんな風に迎えるとは、誰が予想出来た？

「ただいまー！」と玄関から母さんの声。

朝から芹菜と出掛けて、帰ってきたんだ。

「遼太郎！部屋に居るの？」

と俺の部屋のドアを開ける音が聞こえる。

いつまで寝てるの？このバカな息子は！っと言われて掛け布団をガバっと剥ぎ取られる。

どうせ、俺は、バカだよ…。

ベッドの中でうずくまる様に丸くなってる俺に、「具合でも悪いの？」「と心配げな声が落ちてくる。

何だよ！さっきは俺の事、バカとか言ってたくせに… っつて、声が違う！

「芹菜!!」

声だけで分かる!声だけで十分!

飛び起きた俺に少し吃驚した顔で、両手を胸に当て俺の事を見ている芹菜が母さんの横に並んで立っている。

「芹菜、どう…」

言葉が続かなかった。

目の前の芹菜はいつもと違う。

淡い水色のワンピースに、髪はアップにしている、ほんの少しだけ化粧もしてる?

「芹菜?」

「あゝ、やっぱり変?変だよね?」

と言って、母さんに向かって「折角ですけど、着替えてきます」と言う。

「え〜?どうして、可愛いのに!!」

「えっ?どうして、可愛いのに!!」

芹菜がキョトンとした顔で俺と母さんを見て、吹き出した。

笑いを抑えようとしてるのに、どうしても止まらない芹菜は「ごめ〜ん」と繰り返しながら笑い続ける。

「笑い過ぎだろ！芹菜！！」

「え〜？それより、出掛けない？今日は、遼太郎の誕生日ですよー！」

え？

それって…?!

「そうよ、母さんが遼太郎の誕生日にプレゼント用意したんだから」

「な、何を？」

「だから！とっても可愛い芹菜ちゃんを！！」

見る見る内に頬を赤く染めていく芹菜と体温が急上昇する俺。

そんな俺たち二人を見て母さんが

「今からでも、遅くないでしょう？ さあ、行ってらっしゃい！」

「内緒にしてて、ごめんね」

手を合わせて謝る芹菜。そつと片目を開けて俺の様子を伺ってくる。

「おばさんが、遼太郎にプレゼントしたいって言うから…」

と、今回の事の始まりを話してくれる。

「プレゼントを二人で選ばうって、一緒に出掛けたのに、おばさん私にワンピース買ってくれるから…」

恥ずかしいのか、だんだん声が小さくなっていく。

「私もビックリしたよ。まさか、こういうプレゼントなんて…」

そう言って、さっきより顔を真っ赤にする。

「芹菜…。ワンピース、似合ってる」

「ありがとう。ちなみに、ヘアメイクは祥子ちゃんなんだ」

照れ笑いをする芹菜。本気で可愛い。

「どこ行く？」

「どこでも、遼太郎の誕生日だもん。遼太郎の行きたい所」

ぐく、きゅるるる。

そう言えば、昨日の夜から何も食ってない。

「取り合えず、ランチだね」

くすつと笑って、二人で何を食べようかと相談しながら歩く。  
そつと、手を繋ぎながら。

16歳の誕生日。

最高の日になった。

そつと。

〳〳

「遼太郎、メール？」

「うん、まあ……」

【5時までには、帰れ！！】

早川ー！5時って、小学生か！ー有り得ないだろう！ー！

〃 〃

「あれ？またメール？」

「……………」

【芹菜ちゃんの写メ送って！】

母さん！何、考えてんだよ、全く！

まだまだ、芹菜を独り占め出来そうにないな……………。

END

【それから】（後書き）

最後まで、読んで頂きありがとうございます。

これで、本編&おまけ合わせて完全完結となりました。

感想などございましたらお送り下さい。

宜しくお願いします。

相澤塔子

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9916f/>

---

その全てを、無かった事に

2010年10月10日18時41分発行